

綾町埋蔵文化財調査報告書第8集

S I I Y A

椎 屋 遺 跡

九州電力株式会社小丸川幹線新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005.3

宮崎県綾町教育委員会

序 文

本書は九州電力株式会社がおこなっている小丸川幹線新設工事に伴い、実施いたしました椎屋遺跡の発掘調査の報告書であります。今回の調査では、縄文時代の土器のほか、出土遺物等から見て古墳時代前期頃のものと考えられる焼失住居跡が発見されました。このような発見は、今も昔も変わらず照葉樹林の恩恵に預かりながら生活してきた綾の人々の生活を垣間見る歴史的資料になっていくものだと考えます。

今後も開発と文化財の保護との調整を図り、綾町の歴史をひも解くような発見がなされるよう努力していきたいと思います。なお、本書が文化財の保護への理解に役立つとともに、生涯学習・学校教育等の場で広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に多大なるご協力いただいた諸関係機関や町民の方々に厚くお礼申しあげます。

平成17年3月

綾町教育委員会
教育長 玉田清人

例　　言

1. 本書は、九州電力株式会社小丸川幹線新設工事に伴い、綾町教育委員会が九州電力株式会社から委託を受け、平成14年度に実施した「椎屋遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 現地調査における実測図作成は井上が行い、また一部を有限会社ジバングサービスに委託した。
3. 本書に使用した写真は井上が撮影をおこない、空中写真については（有）スカイサーベイ九州に委託した。
4. テフラ検出分析、放射性炭素年代測定等の自然科学分析については（株）古環境研究所に委託した。尚、分析結果（樹種同定）については、本報告書末に掲載している。
5. 遺物の整理及び実測等は、吉浦典子、立元宏美、日高さおり（整理作業員）の協力を得て、井上がおこなった。
6. 本書で用いた方位は磁北、レベルについては海拔絶対高である。
7. 本書で用いた記号は以下のとおりである。
S A：住居址
8. 本書で用いた土色は、『新版 標準土色帖（2001年版）』によるものである。
9. 調査及び本書の作成にあたっては以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきた（五十音順・敬称略）。
秋成雅博、井田篤、稻岡洋道、金丸武司、河野賢太郎、日高広人、藤木晶子
10. 本書の執筆及び編集は、井上がおこなった。
11. 調査の記録類、出土遺物などは全て綾町教育委員会で保管している。

目 次

本文 目 次

第Ⅰ章 はじめ	
第1節 調査にいたる経緯	4
第2節 調査の組織	4
第3節 遺跡の環境	4
第Ⅱ章 調査内容	
第1節 調査概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	7
第Ⅲ章 まとめ	23
第Ⅳ章 分析（樹種同定）	24

挿 図 目 次

第1図 椎屋遺跡位置図	6	第7図 包含層出土遺物実測図①	15
第2図 遺構及び出土遺物分布図	8	第8図 包含層出土遺物実測図②	16
第3図 S A 1 遺物出土状況図	9	第9図 包含層出土遺物実測図③	17
第4図 S A 1 出土遺物実測図①	11	第10図 包含層出土遺物実測図④	18
第5図 S A 1 出土遺物実測図②	12	第11図 包含層出土遺物実測図⑤	19
第6図 S A 1 出土遺物実測図③	13	第12図 包含層出土遺物実測図⑥	20

表 目 次

表1 S A 1 内出土土器観察表	20	表4 包含層出土土器観察表	22
表2 包含層出土土器観察表	21	表5 報告書登録抄	30
表3 石器観察表	21		

図 版 目 次

図版1 椎屋遺跡出土の炭化材	25	図版13 包含層出土石器①	28
図版2 調査区全景	26	図版14 包含層出土遺物②	28
図版3 土層断面	26	図版15 包含層出土遺物③	28
図版4 住居址炭化材出土状況	26	図版16 包含層出土遺物④(壺①)	28
図版5 遺物出土状況	26	図版17 包含層出土遺物⑤(壺②)	28
図版6 炭化木製品	26	図版18 包含層出土遺物⑥(壺③)	28
図版7 S A 1 出土遺物①	27	図版19 包含層出土遺物⑦	29
図版8 S A 1 出土遺物②(壺上半部)	27	図版20 包含層出土遺物⑧(壺④)	29
図版9 S A 1 出土遺物②(壺下半部)	27	図版21 包含層出土遺物⑨(高杯①)	29
図版10 S A 1 出土遺物③	27	図版22 包含層出土遺物⑩(高杯②)	29
図版11 S A 1 出土遺物④	27	図版23 包含層出土遺物⑪	29
図版12 包含層出土遺物①(縄文)	27	図版24 包含層出土石器②(砥石)	29

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

調査の契機は、平成12年6月に九州電力株式会社中央送電建設所（以下九州電力とする）から綾町教育委員会へ小丸川幹線新設工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての照会があったことによる。綾町教育委員会では、九州電力に予定路線内が埋蔵文化財包蔵地にはあたらないが、念のため現地踏査を行う必要がある旨を伝え、現地へと同行してもらった。現地踏査の結果、一ヶ所にて土器片の出土が見られたので、工事予定地の内試掘調査が可能な4ヶ所について平成14年1月に試掘調査をおこなった。試掘調査の結果、当該地にトレーニング内での土器の出土が見られた。この結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて、双方で協議したところ、遺跡の現状保存が困難であるとして平成14年10月23日～平成15年2月28日まで綾町教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施することになった。なお、椎屋遺跡の調査面積は714m²となった。

第2節 調査組織

調査主体 綾町教育委員会

（平成14年度）事務局

教育長	森山 喜代香
社会教育課長	玉田 清人
社会教育課主幹	森山 欣一
社会教育係長	蓮子 浩一
調査員	
社会教育係主事	井上 隆広

（平成15年度）事務局

教育長	森山 喜代香
社会教育課課長	玉田 清人
社会教育課主幹	松本 淳資
社会教育課係長	蓮子 浩一
調査員	
社会教育係主事	井上 隆広

第3節 遺跡の環境

1. 地形的環境

綾町の地形は大きく見ると、東と北隣は国富町の段丘地形及び山岳稜線で境されている。南は高岡町と接し、標高200mの丘陵地形が広がる。西は須木村と山岳の稜線で接している。町の80%は山林が占め、綾北川・南川に囲まれた地域には段丘地形と扇状地が広がっている。一方地質を見ると、山岳地形を構成するのは古第三紀の日向層群（四百万累層群）である。この地層は砂岩層、泥岩層、砂岩泥岩瓦層からなり、NE-SW方向の走向を示している。段丘地形を構成するものは新第三紀中新世の宮崎層群である。この地層は基底礫岩から始まり、砂岩

層、泥岩層、砂岩泥岩互層から成る。宮崎層群の地層は、日向層群に比べて固結度が弱いため侵食されやすく、そのため平坦な段丘地形がよく発達している。宮崎層群は日向層群を傾斜不整合に覆い、砂岩層には貝の化石を多く含んでおり、町内の至るところで貝の化石が発見されている。二反野の丘陵には、高位段丘疊層が堆積している。錦原付近の段丘は、中位段丘疊層から成る。概ね町内の地表付近にはアワオコシ、小林軽石、アカホヤなどのテフラが層をなして降下堆積している。

2. 歴史的環境

町面積の80%を森林が占める綾町は、大淀川水系の綾南川・綾北川の合流点の扇状地に位置しており、集落は平坦地にある中心地区と、その周辺丘陵地及び山間高台地に点在している。綾町の遺跡は、現在のところ平成7・8年度の詳細分布調査で約60箇所が確認されており、それらの遺跡のほとんどは、町中央部を流れている綾南川の南岸、綾北川の北岸、そしてその両河川に挟まれた中間丘陵地に分布している。旧石器時代の遺跡は、現在のところ見つかっていない。しかしながら、平成元年に調査が行なわれた中迫地下式横穴墓群にて、豊坑埋土中に旧石器と見られる石器の剥片が発見されている。

縄文時代の遺跡は、平坦地には見られず、そのほとんどが丘陵地に分布している。縄文時代の表探資料としては、早期、後期のものが多く見つかっている。特に綾町で県内の縄文後期の代表的な遺跡として挙げられるものが、中央丘陵地に所在する尾立遺跡である。この遺跡は、大正7年京都大学の濱田耕作博士によって調査され、その後も何度も宮崎考古学会や宮崎大学等により調査がなされている。主な遺物は、縄文後期の土器のほか磨製石斧、石錘、石鎌などが出土している。また早期の遺物では、押型文土器や貝殻文系の土器の破片が見つかっている。

弥生時代の遺跡は現在のところ見つかっていないが、詳細分布調査において高杯や壺などの破片が、割付地区周辺などにおいて見つかっている。

古墳時代の遺跡は、宮原台地や錦原台地にその存在が確認されている。特に宮原地区では県の文化財に指定されている綾町古墳が3基所在している。また、四反田古墳の付近では昭和43年の畑地改良事業により地下式横穴墓が1基発見され副葬品として土師器・須恵器計7点や人骨が出土した。一方、錦原台地には古墳1基が所在している。その付近の内屋敷遺跡では、天井部の崩落により地下式横穴墓が1基発見され、県の文化課によって昭和56年調査がなされている。また、尾立遺跡の附近の中迫遺跡にも、ゴボウトレントチャーレの掘削により陥没が起こり、県文化課によって発掘調査がなされ3基の地下式横穴が見つかっている。この調査では直刀、鉄斧、イモガイ製貝輪、平玉等が出土し、また遺存状況の悪い女性の人骨も出土している。詳細分布調査においても町内の各所で古墳時代と考えられる遺物が発見されており、遺跡の存在を予感させている。

古代の遺跡については調査がなされていないが、文献等によると「亜椰駅」の存在が予想される。近年、町中心部の試掘調査によっても土師質の土器が出土しており、今後周辺に遺跡が発見される可能性も高いといえる。

中世については、南北朝期を経て綾氏、伊東氏、島津氏の支配下にあった「綾城」の存在がある。綾城は伊東氏時代には、48城の一つとなり山東の拠点として重要な役割を果たした。このほかにも、町内には山城として垂水城跡、そのほかの城跡として肥田木城、内屋敷城などが残っている。特に垂水城、内屋敷城については、現在でも堀や土塁が良好に残っている。

参考文献

- 綾町 1979 「綾町郷土誌」

綾町教育委員会 1995 「中迫地下式横穴墓群」

石川 恒太郎 1969 「東諸県郡綾町地下式古墳調査報告書」
第13集 宮崎県教育委員会

面高 哲郎 1996 「内屋敷地下式横穴群」『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県

日高 孝治 1993 「四反田地下式横穴」『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県



第1図 推測遺跡位置図 ($S = 1/25,000$)

第Ⅱ章 調査内容

第1節 調査概要

今回調査した椎屋遺跡は、綾北川の北岸に位置し、糸迦岳・矢筈岳より派生する丘陵斜面上に存在する。椎屋遺跡内の標高は約214.5mから210.5mで、綾北川の標高約50mから約150mもの高低差があり遺跡の南側から西側にかけては急な斜面が広がっている。

調査区の設定は南北方向に合わせて10m×10mのグリッドを設定し、東西方向をアルファベット標記（A～E）、南北方向を数字標記（1～7）にした。

なお調査方法は、最初に表土である黒褐色土を重機によって剥いだ後、作業員の手作業によつて遺構検出をおこなった。調査当初は拔根作業や天候不順により作業がはからず、予定していた調査期間を延ばすことになった。

第2節 基本層序

椎屋遺跡の基本層序の観察は、調査区北側の壁面を利用した。第Ⅰ層は、黒褐色（Hue2.5Y3/1）で表土である。第Ⅱ層は、オリーブ褐色（Hue2.5Y4/3）で5mm前後の礫を少量含んでいる。第Ⅲ層は、黄褐色（Hue10YR5/6）で1mm～1cm前後的小礫を含んでいる。第Ⅳ層については、2つに区切られ、第Ⅳ-1層は明褐色（Hue7.5YR5/8）で3mm前後の礫粒を含み、非常にサラサラとした層である。第Ⅳ-2層は、明赤褐色（Hue5YR5/8）で第Ⅳ-1層よりも若干しまりがよい。第Ⅴ層は、明黄褐色（Hue10YR6/6）で5mm～1cm前後の礫を少量含み、やや粘性がある。第Ⅵ層は、にぶい褐色（Hue7.5YR5/3）で1～3mm前後の白色砂岩粒を多量に含み、非常に硬い。第Ⅶ層は、褐色（Hue7.5YR4/3）で3～5cmの砂岩粒を多量に含んでいる。大小の砂岩片が重なりあい、互層となっている。

以上が基本層序となるが、株式会社古環境研究所の火山灰分析により第Ⅰ層に霧島高原スコリアに由来するテフラ粒子が検出されている。また、遺物の出土が見られた第Ⅳ層についても、鬼界アカホヤ火山灰に由来するテフラ粒子が検出されており、第Ⅳ層はアカホヤ及び2次アカホヤであると考えられる。

第3節 遺構と遺物

本遺跡では縄文時代および古墳時代と考えられる遺物が出土している。

遺構については縄文時代のものはみられず、古墳時代と考えられる住居跡がみつかった。また、調査区に3ヶ所の土器集中部がみられたがプランが検出できなかったため、そこで出土した完形の土器は、包含層の土器として報告している。

【1号竪穴住居跡（SA 1：第3図）】

調査区のほぼ中央で確認した。明確なプラン及び柱穴は検出できなかったが、大きさは約4.5mほどと推定した。東半分しか検出できず、炭化材が一部残った状況でみつかり、そして西側に多量の土器の出土が見られた。また、床面直上から炭化した木製品が出土した（図版6）。

第2図 遺構及び出土遺物分布図 (S = 1 / 200)



第3図 SA1遺構出土状況図 ($S = 1/40$)



【S A 1 出土の遺物（1～23）】

1、2はタタキ目を有する壺の口縁部である。1については、口唇部に沈線を有する。3～7は同じく壺の口縁部である。口唇部に調整を有するもの（3、4、7）、また有しないもの（5、6）が見受けられる。8、9は壺の胴部である。8については、横位のタタキ目を有し、口縁部はくの字状に外反すると思われる。9は、軽いタタキ目を有し、内面に指押えによる器面調整、粘土つなぎ目が見られる。

10は、大型の壺である。胴部に最大径があり、底部は平底ではあるが比較的不安定である。内面は工具による斜・横位のナデが見られる。内面底部付近は指押さえによる器面調整となっている。11は壺の底部で丸底を呈し、内面に工具による横位のナデ及び指押えによる器面調整が見られる。

12、13は小型丸底壺の口縁部である。12は口縁端部をやや尖らせ気味に成形し、13は丸くおさめている。12、13は内外面とも工具による横位のナデによる器面調整が見られる。14～16は頸部である。14は頸部内面が緩やかにカーブを描き立ち上がる。15、16はいったん平面をつくり立ち上がる。17～19は胴部～底部である。17は扁球形を呈し、内面に指押えによる調整が見られる。18は肩の張った扁球形を呈し、外面がヘラミガキ、内面がナデ及び指押えによる器面調整をおこなっている。19についても一部外間にヘラミガキによる器面調整が見られる。

20は、高杯の杯部である。受部は直線的で、また口縁部についても直線的に外傾している。外表面は口縁端部が工具による横位のナデ、その他はT具による斜位のナデまた内面を工具による横位のナデにより器面調整している。21、22は杯底部である。23は脚部である。広がりの緩やかなラッパ状を呈している。

【包含層の遺物（縄文時代）】

①土器（24～35）

縄文時代の土器については、調査区内の包含層にて若干出土している（図7、8）。文様ごとにI～VI類に分類した。それぞれの特徴は以下のとおりである。

I類：押型文系の土器（24、25）

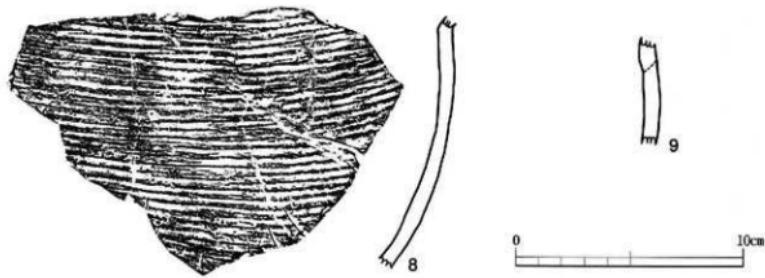
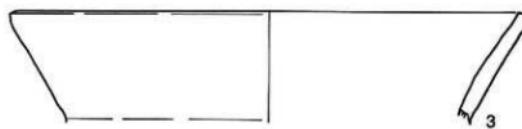
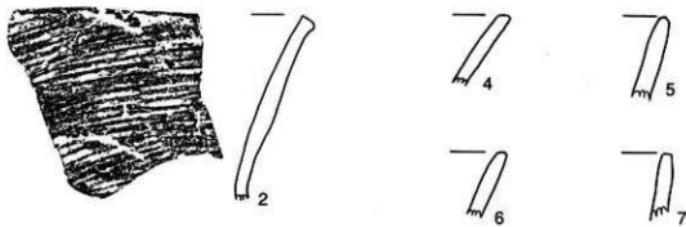
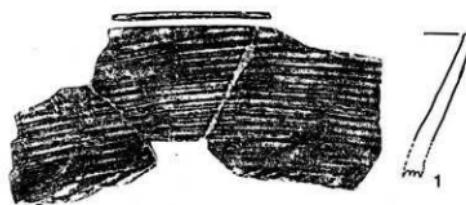
24は頸部である。外面に横位の山形押型文を持ち、内面は横位のナデによって器面調整される。25は胴部である。外面に横位の山形押型文を持ち、内面は指押えによって器面調整される。

II類：貝殻文系の土器（26～30）

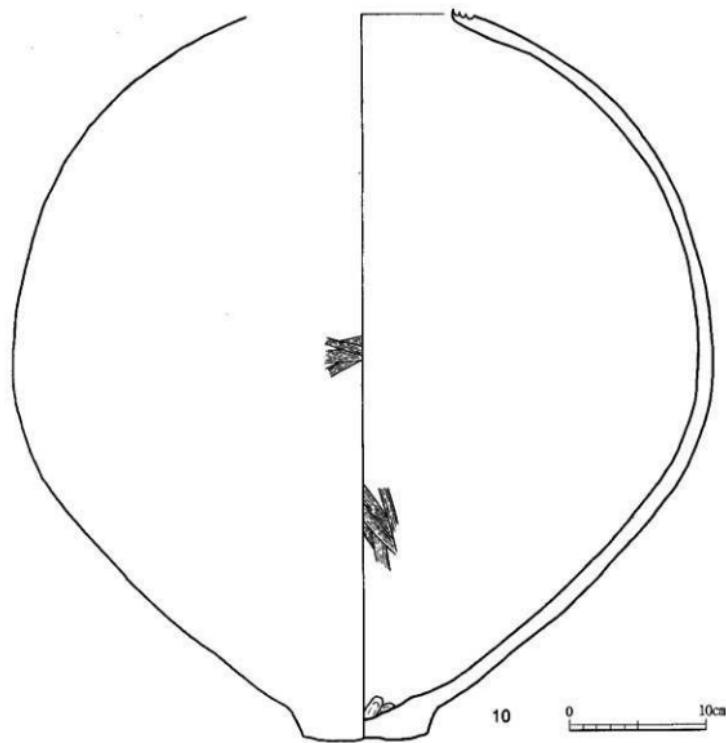
26の外面は、貝殻による横位の押引文である。27～28の外面については横位の貝殻条痕文が施文されている。29の外面は、斜位の貝殻条痕文が施文されている。30の外面は斜位の貝殻条痕文で施文の後、ミガキが入っている。

III類：平柄式土器（31、32）

31、32ともに外面は斜位の連続刺突文及び沈線が施文されている。



第4図 SA1出土遺物実測図①



第5図 SA1出土遺物実測図②

IV類：塞ノ神式土器（33）

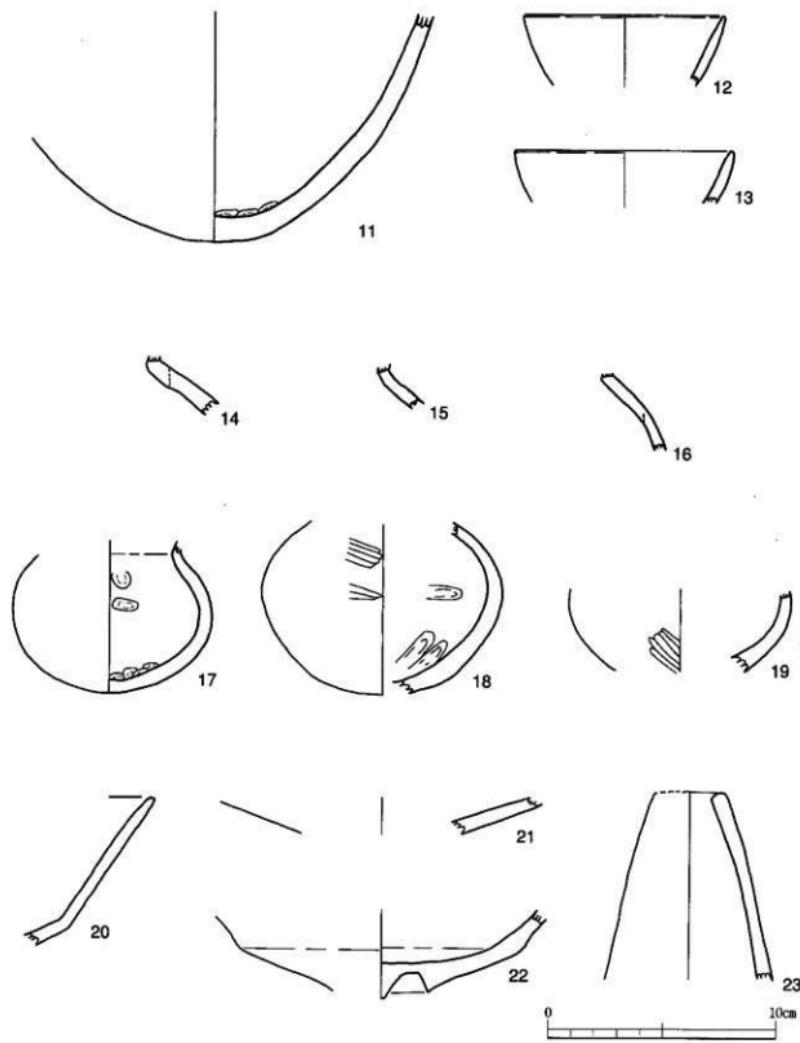
円筒形を呈すると考えられる。数条の沈線が横位に巡る。

V類：轟式土器（34）

口縁部である。口縁部と並行に4本の断面が均等に三角形をなし整った隆起帯を持ち、また口唇部に浅い刻み目を持つ、内面は斜位の貝殻条痕文で器面調整する。

VI類：その他の土器（35）

外面はハケメ、内面はミガキである。抉りが見られ土器片錐などの二次加工品ではないかと考えられる。



第6図 SA1出土遺物実測図③

②石器（36、37）

36、37は砂岩製の敲石である。37については、すべての面に敲打痕がみられる。そのほか圖化はしていないが、黒曜石の剥片が1点出土している。

【包含層の遺物（縄文時代以降）】

①土器（38～69）

38～48は壺の口縁部である。口縁部の形態については、口縁端部を尖らせ気味にするもの（38、39）、口唇部に調整を有するもの（40～48）が見られる。49は壺の口縁部～胴部である。なお、50の底部は同一個体であると考えられる。頸部は若干ひらき気味のくの字状を呈し、胴部はあまり張らずに底部へと続く。底部はドーナツ状の紐を平たくつぶして貼り付けたような形を呈す。51は、同じく底部でドーナツ状である。

52は、二重口縁の壺である。口縁部の内面は稜をつくらず緩やかに立ち上がり外面はくの字状に立ち上がる。胴部は長形胴である。外内面ともにハケにより器面調整されており、また内面の底部付近は指押えにより器面調整される。53は、球形を呈する壺である。

54は小型の球形胴をもつ壺である。口縁部ははっきりとしたくの字状に立ち上がっている。外面はタタキにより器面調整されている。一方、内面は工具によるナデ及び指押えによる器面調整である。55は、二重口縁の口縁部付近である。56、57は口縁部である。58は、壺の胴部であり、球形を呈すると考えられる。

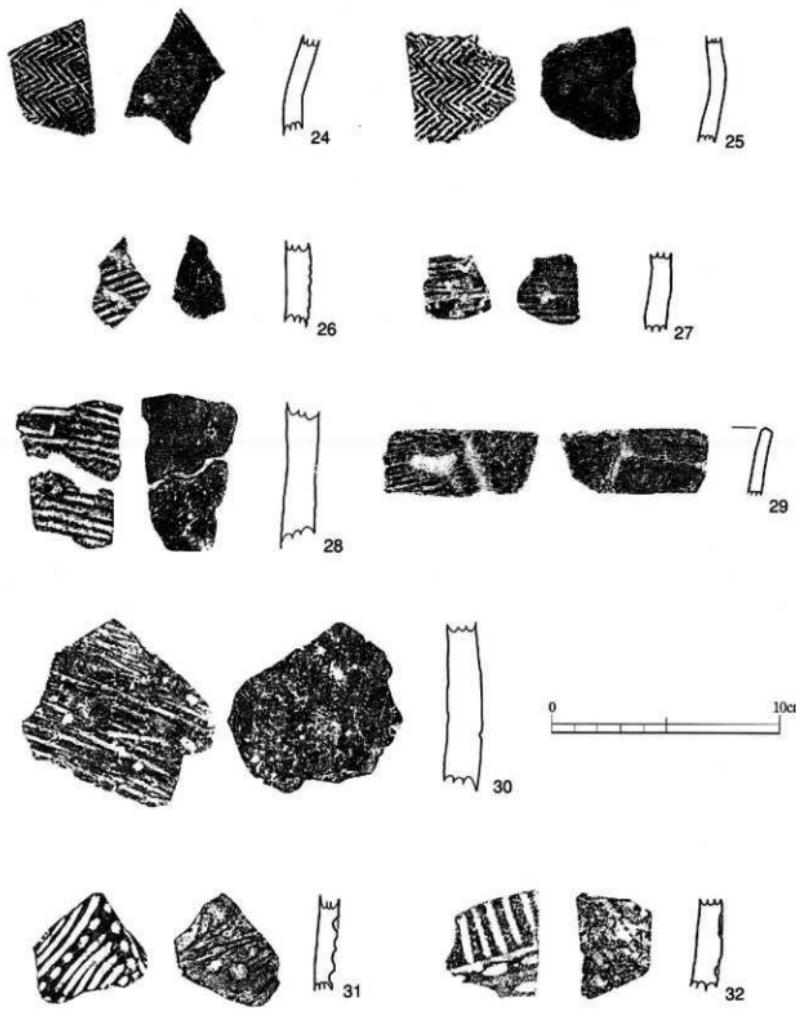
59～62は小型丸底壺の口縁部である。62の器面調整は外内面ともに工具によるナデである。63は同じく小型丸底壺の胴部～底部付近で丸底である。

64は高杯である。杯部は端部にかけてまっすぐと薄く尖る。脚部はエンタシス状である。外内面ともにミガキにより器面調整される。65も同じく高杯である。杯部は一度屈曲し、外反しながら立ち上がり端部は舌状に薄く尖る。脚部は緩やかなラッパ状を呈する。66も同じく高杯の杯部であり、一度明瞭に屈曲し若干外反しながら立ち上がる。67～69は高杯の脚部である。67は脚端部が緩やかに外反しながら開いている。一方、68・69は一度外面に稜線をつけながら開いている。

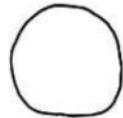
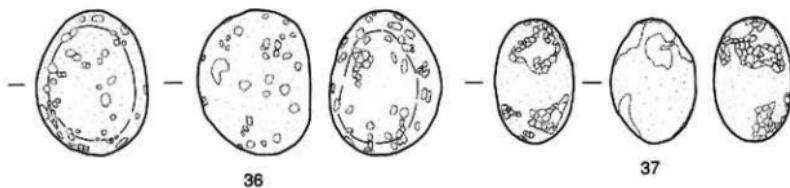
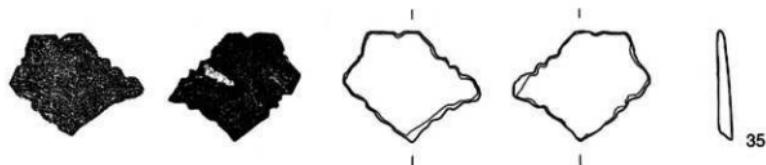
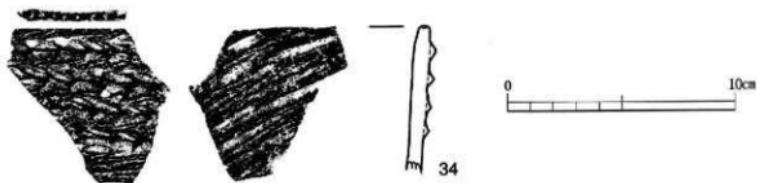
②石器（70）

70は砥石である。

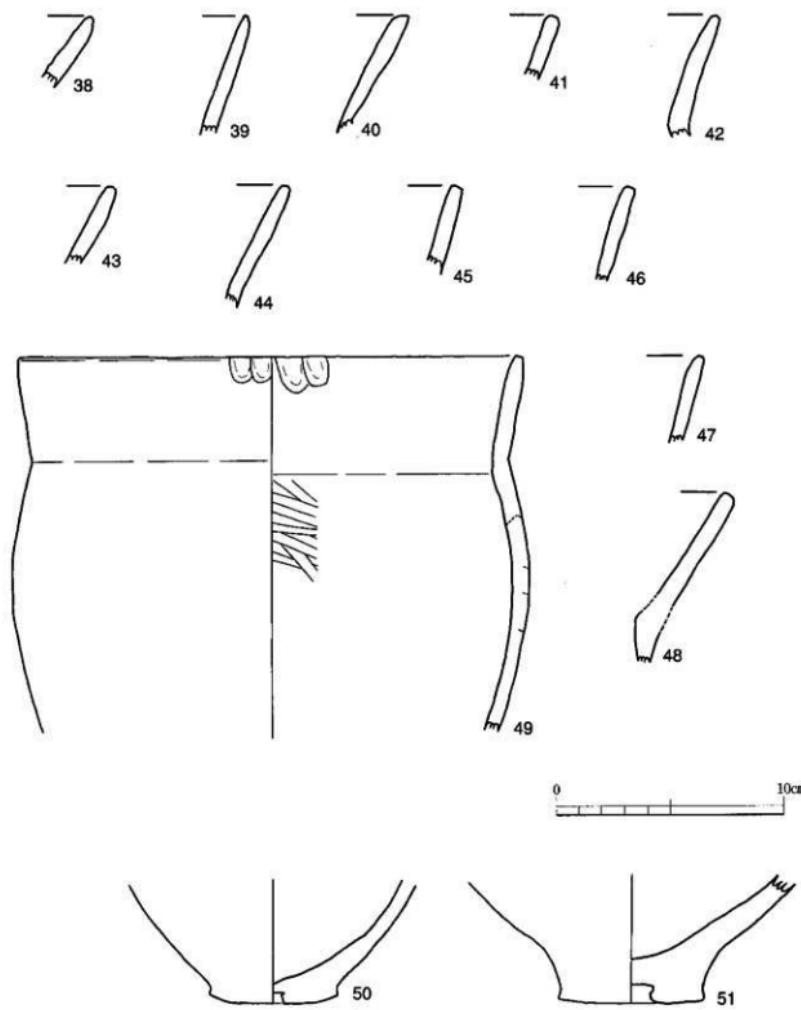
以上が主な出土遺物の説明である。



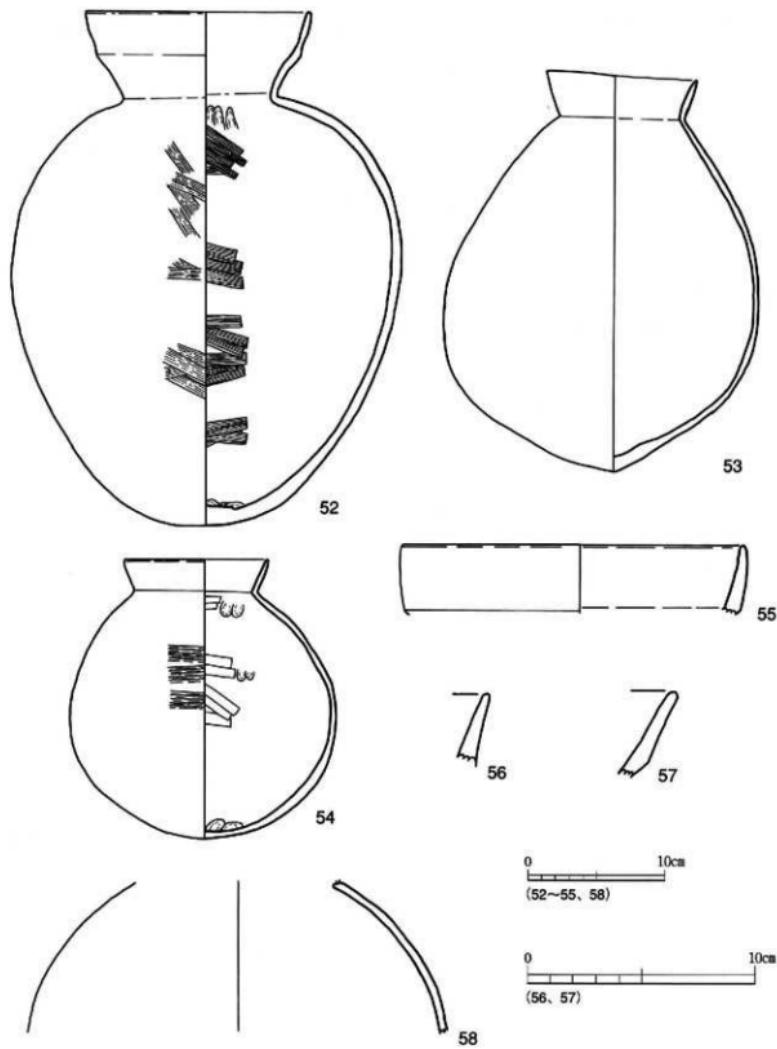
第7図 包含層出土遺物実測図①



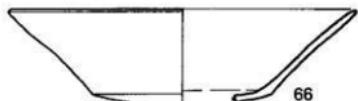
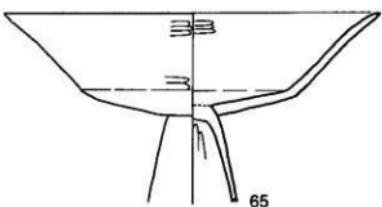
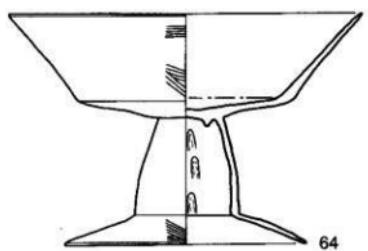
第8図 包含層出土遺物実測図②



第9図 包含層出土遺物実測図③

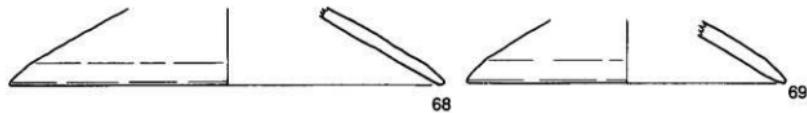
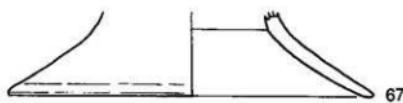


第10図 包含層出土遺物実測図④

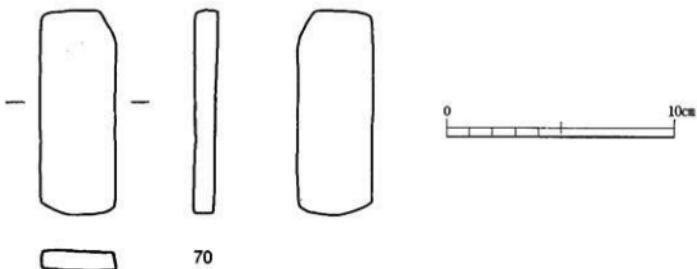


0 10cm
(64、65、66)

0 10cm
(59~63、67~69)



第11図 包含層出土遺物実測図⑤



第12図 包含層出土遺物実測図⑥

表1 SA1内出土土器観察表

胎土 (A:角閃石、B:雲母片、C:白色粒、D:長石、E:砂粒) (多:多量、中:中量、少:少量、微:微量)

図面番号	遺物番号	実測番号	出土地区	器種	部位	調整	色調	胎土	備考
4	1	18	C 3	壺	口縁部	外: タタキ(横) 内: ナデ(横・斜)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 中	外面スス付着 口唇部に沈線
4	2	19	C 3	壺	口縁部	外: タタキ(横・斜) 内: ナデ(横・斜)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	B: 微・D: 微・E: 中	外面スス付着
4	3	20	C 3	壺	口縁部	外: ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: 明黄褐色 内: 明黄褐色	E: 中	
4	4	21	C 3	壺	口縁部	外: 工具ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄 内: にぶい黄	E: 中	
4	5	22	C 3	壺	口縁部	外: ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 中	
4	6	23	C 3	壺	口縁部	外: ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄	E: 中	
4	7	24	C 3	壺	口縁部	外: タタキ(横)・ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 中	
4	8	25	C 3	壺	頸部	外: タタキ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 多	外面スス付着
4	9	26	C 3	壺	頸部	外: タタキ(横)・指押 内: ナデ(横)・指押	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 中	外面スス付着
5	10	17	C 3	壺	ほぼ完形	外: 工具ナデ(横・斜) 内: 工具ナデ(横・斜)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 微・B: 微・D: 少	
6	11	30	C 3	壺	頸部	外: ナデ(横)・指押 内: ナデ(横)・指押	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 種・D: 微	
6	12	33	C 3	小型丸底壺	口縁部	外: 工具ナデ(横) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	D: 微	
6	13	34	C 3	小型丸底壺	口縁部	外: 工具ナデ(横) 内: 工具ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	D: 微	
6	14	31	C 3	小型丸底壺	頸部	外: 工具ナデ(横)・指押 内: ナデ(横)・指押	外: 種 内: 種	D: 少	
6	15	36	C 3	小型丸底壺	頸部	外: 工具ナデ(横・斜) 内: ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	E: 多	外面スス付着
6	16	37	C 3	小型丸底壺	頸部	外: ナデ(横・斜) 内: 工具ナデ(横・斜)・指押	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 微・D: 少	
6	17	38	C 3	小型丸底壺	ほぼ完形	外: ナデ(横・斜)・指押 内: 工具ナデ(横・斜)・指押	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 微・D: 少・E: 微	内面スス付着 トレンチ内出土
6	18	39	C 3	小型丸底壺	頸部	外: ハラミガキ 内: ナデ(横・斜)・指押	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 種	
6	19	40	D 3	小型丸底壺	頸部	外: ハラミガキ 内: 工具ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 微・D: 微	
6	20	41	C 3	高杯	口縁部	外: 工具ナデ(横・斜) 内: 工具ナデ(横)	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	A: 少・D: 少	

表1 SA1内出土土器観察表

6	21	42	C 3	高杯	杯底部	外:ナデ 内:ナデ(横)	外:橙 内:橙	A:微・D:少・D:少	
6	22	43	C 4	高杯	杯底部	外:ナデ(横)・指押 内:ナデ(横)	外:橙 内:橙	D:微・E:中	
6	23	44	C 3	高杯	脚部	外:ナデ 内:工具ナデ(横)	外:橙 内:橙	D:中・E:微	

表2 包含層出土土器観察表(縄文土器)

胎土(A:角閃石、B:雲母片、C:白色粒、D:長石、E:砂粒)(多:多量、中:中量、少:少量、微:微量)

掲図番号	遺物番号	実測番号	出土地区	部位	調整	色調	胎土	備考
7	24	3	B 3	頸部	外:山形押型文(横) 内:ナデ(横)	外:橙 内:橙	A:少・B:少・C:微 D:微・E:中	手向山式
7	25	9	C 3	胴部	外:山形押型文(横) 内:指押	外:橙 内:橙	A:少・B:少・C:少 E:少	手向山式
7	26	5	B 3	胴部	外:押引文(横) 内:ナデ	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	A:少・C:多・D:中 E:中	
7	27	6	B 3	一	外:貝殻条痕文(横) 内:貝殻条痕文(横)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	A:微・B:微・C:少 D:微・E:中	
7	28	7	C 3	胴部	外:貝殻条痕文(横) 内:ナデ	外:明褐色 内:にぶい黄褐色	A:中・B:微・C:少 D:微・E:少	
7	29	10	C 3	口縁部	外:貝殻条痕文(斜) 内:ミガキ	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	A:中・B:少・C:中 E:少	
7	30	11	TR6	胴部	外:貝殻条痕文(斜)の後ミガキ 内:ナデ	外:にぶい黄褐色 内:黒	A:微・B:微・C:中 D:微・E:少	
7	31	4	B 3	胴部	外:連続刺突文(斜)、沈線(斜) 内:貝殻条痕文(斜)	外:にぶい橙 内:にぶい橙	A:少・B:少・C:多 D:微・E:中	平柄式
7	32	12	C 3	胴部	外:連続刺突文(斜)、沈線(斜) 内:不明	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	A:少・B:多・C:中 D:少・E:中	平柄式
8	33	2	B 2	胴部	外:沈線文(横) 内:不明	外:明褐色 内:にぶい黄褐色	A:微・B:微・C:少 D:少・E:中	塞ノ神式
8	34	1	B 2	口縁部	外:貼付突帯、貝殻条痕文(斜) 内:貝殻条痕文(斜)	外:橙 内:にぶい赤褐色	A:微・B:少・C:少 D:少・E:中	口唇部に連続刺突文 轟式
8	35	51	C 3	口縁部	外:ハケヌ 内:ミガキ	外:にぶい黄褐色 内:黒褐色	A:微・B:微・D:中	二次加工品(?)

表3 石器観察表

掲図番号	遺物番号	実測番号	出土地区	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
8	36	14	B 3	敲石	砂岩	6.4cm	4.95cm	4.9cm	214 g	
8	37	15	B 2	敲石	砂岩	5.45cm	3.45cm	3.7cm	94.5 g	
12	70	103	C 3	砾石	砂岩	9.05cm	3.45cm	0.9cm	66.0 g	

表4 包含層出土土器觀察表（縄文時代以降）

胎土（A：角閃石、B：雲母片、C：白色粒、D：長石、E：砂粒）（多：多量、中：中量、少：少量、微：微量）

図面番号	遺物番号	美測番号	出土地区	器種	部位	調整	色調	胎土	備考
9	38	53	B 2	甕	口縁部	外：工具ナデ（鉗） 内：工具ナデ（鉗）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	E:中	
9	39	54	B 3	甕	口縁部	外：工具ナデ（鉗・鉗）・指押 内：工具ナデ（鉗・鉗）・指押	外：にぶい橙 内：にぶい橙	E:中	
9	40	56	C 3	甕	口縁部	外：ナデ（横・斜） 内：ナデ（横）	外：にぶい橙 内：橙	D:微・E:多	外面若干スス付着
9	41	57	C 3	甕	口縁部	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	D:微・E:多	
9	42	58	C 3	甕	口縁部	外：工具（横） 内：ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：橙	E:多	
9	43	59	C 3	甕	口縁部	外：工具ナデ（横） 内：工具ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	E:中	
9	44	60	C 4	甕	口縁部	外：ナデ（横）・指押 内：工具ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	E:中	
9	45	61	C 4	甕	口縁部	外：タケキ（横） 内：工具ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	E:中	
9	46	62	C 4	甕	口縁部	外：タケキ（横） 内：工具ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	E:中	
9	47	63	C 4	甕	口縁部	外：ナデ（横）・指押 内：ナデ（横）	外：橙 内：橙	A:微・E:中	
9	48	64	C 5	甕	～頸部	外：ミガキ（横・鉗） 内：ミガキ（横・鉗）	外：にぶい橙 内：にぶい橙	E:多	
9	49	67	B 2	甕	～胴部	外：工具ナデ（横・鉗）・指押 内：工具ナデ（鉗・鉗）・指押	外：にぶい黄橙 内：泡灰	E:中	口縁部に指紋あり 50番と同個体
9	50	68	B 2	甕	底部	外：ナデ（横） 内：工具ナデ（横・鉗・円）	外：にぶい黄橙 内：泡灰	E:中	49番と同個体
9	51	70	C 4	甕	底部	外：ナデ（横） 内：ナデ	外：橙 内：橙	D:多	
10	52	46	C 5	壺	ほぼ完形	外：ハケ（横・鉗）・指押	外：にぶい黄橙 内：指押	A:少・D:少・E:中	
10	53	47	C 5	壺	完形	外：ナデ（横）・指押	外：にぶい黄橙 内：明黄褐色	A:微・C:微・D:微	
10	54	48	C 5	壺	完形	外：タケキ（横・鉗） 内：工具ナデ（横・鉗）・指押	外：明黄褐色 内：明黄褐色	E:多	
10	55	72	C 3	壺	口縁部	外：工具ナデ（横） 内：工具ナデ（横）	外：橙 内：にぶい黄橙	A:微・D:少	
10	56	74	C 3	壺	口縁部	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:少・D:少	
10	57	75	B 3	壺	脚部	外：工具ナデ（横・鉗） 内：ナデ（横）	外：にぶい橙 内：橙	A:微・D:少・E:少	
10	58	76	C 5	壺	脚部	外：工具ナデ（横・鉗） 内：不明	外：にぶい橙 内：にぶい橙	A:少・E:微	
11	59	78	B 2	小型丸底壺	口縁部	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）	外：橙 内：橙	D:微・E:少	
11	60	79	C 3	小型丸底壺	口縁部	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）	外：橙 内：橙	D:微・E:微	
11	61	80	C 4	小型丸底壺	口縁部	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	D:微・E:微	
11	62	82	C 4	小型丸底壺	口縁部	外：工具ナデ（横・鉗） 内：工具ナデ（鉗）	外：橙 内：橙	A:微・D:微・E:微	
11	63	85	C 3	小型丸底壺	脚部～底部	外：ナデ・指押 内：ナデ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:微・E:微	
11	64	49	C 3	高杯	完形	外：ミガキ（横・鉗） 内：ミガキ（横・ナデ（横））	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	—	
11	65	50	C 5	高杯	ほぼ完形	外：ナデ（鉗）・ミガキ（横） 内：ナデ（鉗）・ミガキ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:微	
11	66	88	B 2	高杯	脚部～底部	外：ナデ（鉗）・ミガキ（横） 内：ナデ（鉗）・ミガキ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:少・E:中	
11	67	93	B 2	高杯	脚部～	外：ナデ	外：橙 内：橙	A:微・D:微・E:微	
11	68	94	C 4	高杯	脚端部	外：ナデ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:微・E:微	
11	69	99	C 5	高杯	脚部～	外：ナデ（横）	外：橙 内：橙	A:微・D:微・E:微	

第III章　まとめ

今回の椎屋遺跡の調査では、縄文時代～古墳時代の遺構・遺物が多く出土した。しかしながら調査員の力不足もあり、それらすべての大重要な情報を調査によって見出すことができたとは言えない。今回出土した土器や限られた情報の中からではあるが、最後に若干の検討をまとめてみたい。

今回調査した椎屋遺跡は、綾北川の北岸に位置する丘陵斜面上に存在する。調査区のほぼ真ん中にて住居址1基が検出された。明確なプランは検出できていないが隅丸方形の住居址であると考えられる。住居址の床面には住居の柱として使われたであろう炭化材が比較的良好に残存していた。また、規則的に穴を開けられている炭化した木製品が出土し、当時ここに住んでいた人が何らかの目的によりこれを使っていたことにまちがいはない。今回は無理であったが、今後類例を見つけていきたい。住居址の年代は、住居内埋土などの検討が十分に出来ていないためむずかしいと考えられるが、出土している土器などを検討してみると古墳時代前期ごろのものと考えるのが妥当ではないかと思われる。調査区内で見つかった他の土器集中部についても大きな時期のひらきはないものと考えられる。

今回の調査は、これまで単発的で小規模の試掘調査しか行われなかった綾町にとっては初めて本格的なものであった。しかし、この遺跡が何千年もの間地中に眠って保存してきた情報が十分に汲み取れなかつたと思うと非常に残念である。また、出土遺物の整理から資料の分析については不十分な点が多く、今後詳細な整理及び検討の中でこの遺跡についての新たな情報を明らかにし、公表していきたい。最後になったが、冒頭でも記したように、現地調査中及び本書を作成する過程で多くの方々より貴重な御指導と御助言をいただいたが、それを十分に生かしきれなかつた。末筆ながらお詫びと感謝を申し上げたい。

《引用・参考文献》

- 今塙屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器
—宮崎平野部を中心にして—」
『九州前方後円墳研究会発表要旨資料』 九州前方後円研究会
松永幸寿 2001「宮崎平野における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」「宮崎考古」
第17号 宮崎県考古学会
吉本正典 1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察」「宮崎考古」第14号
宮崎県考古学会

第IV章 分析（樹種同定）

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、S A 1 住居跡から出土した炭化材 4 点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

主要な分類群の顕微鏡写真を図版 1 に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科シイ属 図版 1-1, 2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。

晩材部で小道管が火炎上に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平状細胞からなり同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

図版 1-3

横断面：中型から大型の道管が、単独および 2～3 個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

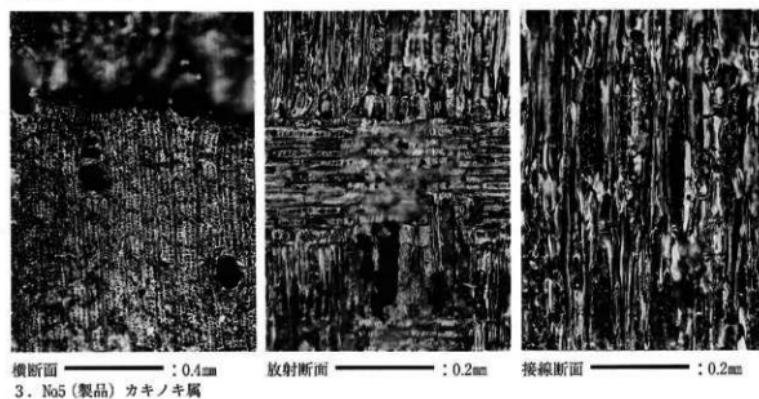
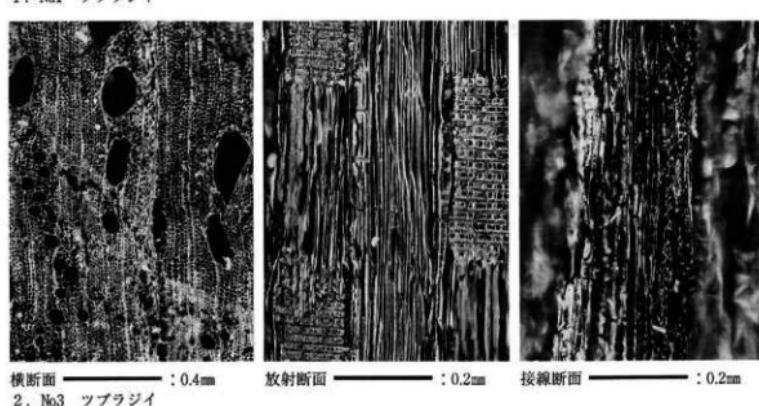
接線断面：放射組織は異性放射組織型で 1～2 細胞幅のものが多いが、3 細胞幅のものも見られる。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

5. 所見

分析の結果、S A 1 住居跡から出土した炭化材のうち、グループ 1、グループ 2、グループ 3 の炭化材は、いずれもシイ属のツブラジイと同定された。また、グループ 5 の炭化材（製品）は、カキノキ属と同定された。

ツブラジイは、関東以南の本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ 20m、径 1.5m に達する。材は耐久性、保存性低く、建築材などに用いられる。カキノキ属は、本州（西部）、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ 20m、径 1m くらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

図版 1 椎屋遺跡出土の炭化材

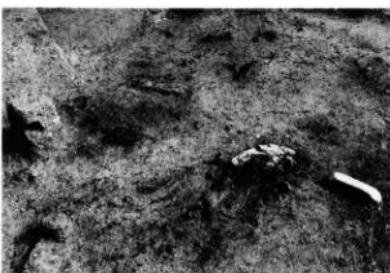




図版2 調査区全景



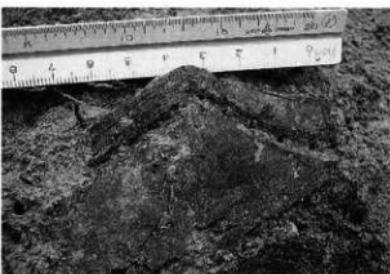
図版3 土層断面



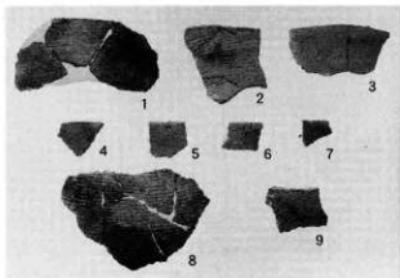
図版4 住居址炭化材出土状況



図版5 遺物出土状況



図版6 炭化木製品



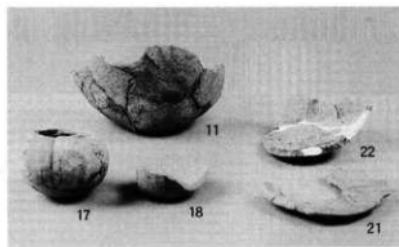
図版7 SA 1出土遺物①



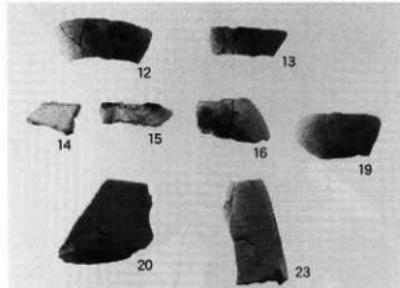
図版8 SA 1出土遺物② (壺上半部)



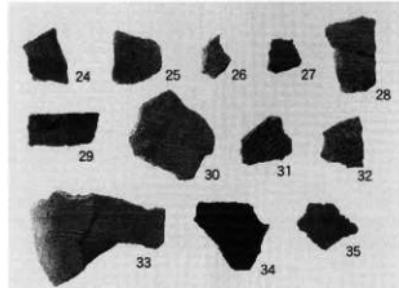
図版9 SA 1出土遺物② (壺下半部)



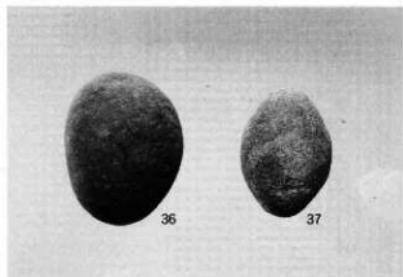
図版10 SA 1出土遺物③



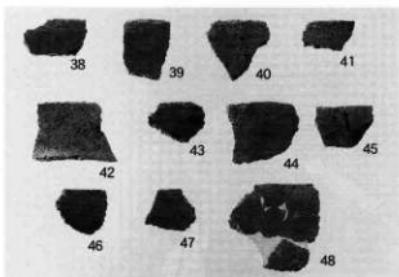
図版11 SA 1出土遺物④



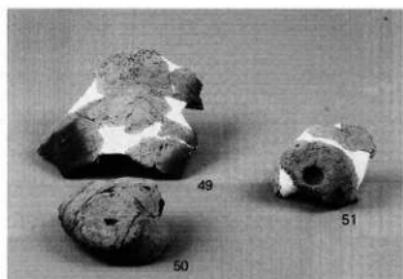
図版12 包含層出土遺物① (縄文)



图版13 包含层出土石器①



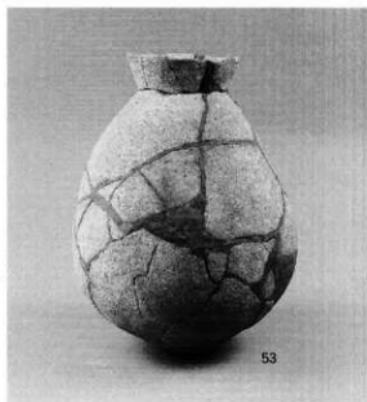
图版14 包含层出土遗物②



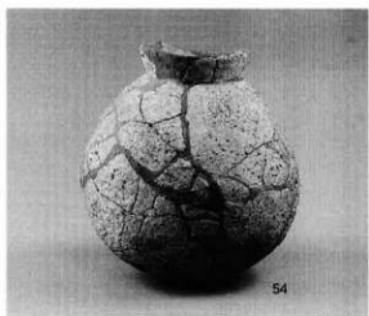
图版15 包含层出土遗物③



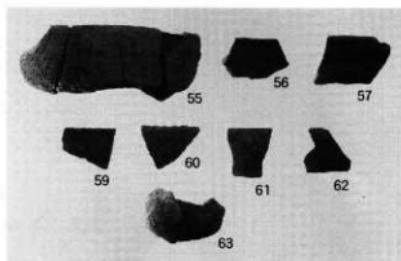
图版16 包含层出土遗物④ (壹①)



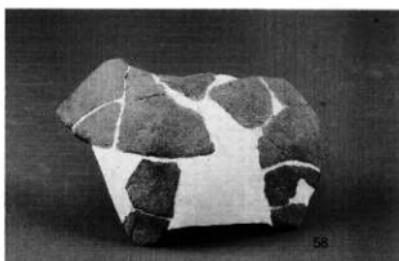
图版17 包含层出土遗物⑤ (壹②)



图版18 包含层出土遗物⑥ (壹③)



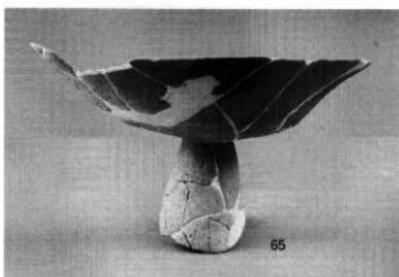
図版19 包含層出土遺物⑦



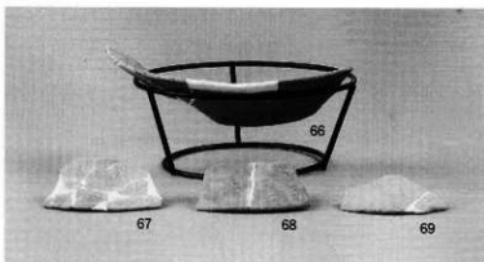
図版20 包含層出土遺物⑧（壺④）



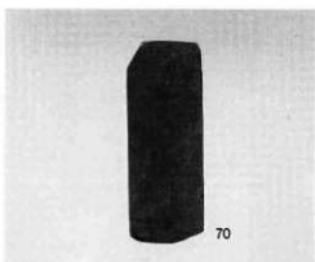
図版21 包含層出土遺物⑨（高杯①）



図版22 包含層出土遺物⑩（高杯②）



図版23 包含層出土遺物⑪



図版24 包含層出土石器②（砥石）

表5 報告書登録抄

フリガナ	シイヤイセキ					
書名	椎屋遺跡					
副書名	九州電力株式会社小丸川幹線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	綾町埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第8集					
編集者名	井上 隆広					
発行機関	綾町教育委員会					
所在地	〒880-1303 宮崎県東諸県郡綾町大字南俣546-1					
発行年月日	2005年3月31日					
所収遺跡名	所在地	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
しいや 椎屋遺跡	綾町大字入野字椎屋 5512-1、2	31° 01' 48"	131° 13' 15"	H14.10.23 ～ H15.2.28	714m ²	鉄塔 建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
集落	縄文時代		土器、敲石			
	古墳時代	住居跡	土器、砥石、炭化 した木製品			

綾町埋蔵文化財調査報告書第8集
椎屋遺跡

九州電力株式会社小丸川幹線新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月

編集・発行 綾町教育委員会
〒880-1303
宮崎県東諸県郡綾町大字南俣546-1
TEL. 0985-77-1183
印 刷 ㈱印刷センタークロダ
〒880-0022
宮崎市大橋2丁目175番地
TEL. 0985-24-4351

